大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

白川文字学の今後の展望：中国の研究との対比を中心に

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-04-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐藤, 信弥
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016790

白川文字学の今後の展望
——中国の研究との対比を中心に

佐　藤　信　弥

はじめに

本稿は2017年９月２日に「立命館土曜講座　白川学の展望と未来」の一環として実施された大形徹先生との共同講演のうち、筆者が担当した部分の内容を増補のうえ文章化したものである[1]。

「白川文字学の今後の展望」というのは講演の際に指定された題目である。本来は大形先生が単独で講演するはずであった。講演を行う旨伺った際に、白川静の文字学の今後の展望を探るには、まずその特徴を把握する必要がある、白川静は従来藤堂明保や加藤常賢といった日本の研究者を比較対象として議論されてきたが[2]、それよりは中国の文字学と比較した方が、白川文字学の特徴がより明確に見えてくるのではないかと私見を述べたところ、それでは一緒に講演をしたらどうかということになり、共同講演が実現したという次第である。論旨に合わせ、筆者の担当部分には「中国の研究との対比を中心に」という副題を加えることにした。

1　白川文字学の特徴

まず白川文字学の特徴を把握しておきたい。嘉瀬達男は白川文字学の特色と独自性を以下の４点にまとめている。すなわち、①「研究資料として甲骨文・金文を活用すること」、②「民俗学・文化人類学などを応用すること」、③「字形の分析を中心とすること」、④「研究成果を一般向けに積極的に公開すること」である[3]。

このうち①については、白川静と同時代の中国や台湾などの文字学者も当たり前のように行っていることであり、白川静のみの特徴であるとか独自性を示すものとは言えない。③は、文字の三要素とされる字形・字音・字義のうち、字形の研究を根本とするということである。しかしこれについても、白川静より世代が上となる于省吾が、古文字の研究については字形が唯一の基礎であると主張し[4]、この方針が後進の研究者に「以形

為主」（形を以て主と為す）のフレーズでもって受け継がれている[5]。字形の分析を重視すること自体は白川静の独創とは言えない。

それでは白川文字学と中国の文字学との違いを示す要素は何であろうか。上記のうち④は研究の中身そのものの特徴とは言えないので除外すると、白川文字学の特色と独自性として残されるのは、②の「民俗学・文化人類学などを応用すること」ということになる。これについては、嘉瀬氏が「もともと『詩経』『万葉集』研究を目的とした古代社会研究が白川学の根本にあることに起因しているのであろう」と指摘している[6]。白川静本人も自身の研究について「私の漢字研究は、古代文化探究の一方法として試みてきたものであり、無文字時代の文化の集積体として、漢字の意味体系を考えるということであった」と述べている[7]。白川静にとって古文字は古代の文化や社会をさぐる材料のひとつということである。

そのことを示す事例として、金文に見える「蔑曆」[8]の語に関する研究を取り上げてみたい。「蔑曆」は殷代から西周中期の金文に多く使用されている。「蔑」字はまた「穢」と表記されることもある。その語義については清代より議論が続いており、従来は多くある人の経歴や功績を称えるとか、ねぎらうの意であるとされてきた[9]。

①金文の「蔑」字

②金文の「穢」字

③金文の「曆」字

図1

白川静の研究としては、日本語論文の「蔑曆解」[10]及び中国語論文の「再論蔑曆」[11]がある。そのあらましは以下の通りである。まず「蔑（蔑）」字は、戦勝の儀礼として敵方の巫女を戈に繋けてこれを誅するさまを象ったものとする（図1①・②）。古代には戦争の際に巫女を従軍させる風習があり、その呪力でもって勝利をもたらすことが期待されたというのである。そして「曆（曆）」字については、「厤」は左右の軍門を示し、「曰」は冊書を収める器を示す「㠯」から筆画を増したもので、器中に文書のある形を示す。「曆」は軍門において文書を用いるさまを象り、その人の功績を表彰する意であるとす

る（図１③）。この二つの字釈を踏まえ、「蔑曆」とは「曆を蔑す」と訓じ、功績、特に軍功を表彰するの意であると結論づける。白川静は「蔑曆」の語義の追求とともに、「蔑」「曆」二字の字形から、戦争に関する風習や呪術のあり方を見出そうとしたということになる。こうした白川文字学のエッセンスを示すのが、岩波新書の『漢字』に代表される白川静の一般書ということになる[12]。

２　中国文字学の特徴

ついで中国文字学の特徴について見ていくことにしたい。中国でも古文字の研究においては字形の分析が重視されていることは前述の通りである。ただしその内実は白川文字学とは異なる。やはり前文で触れた于省吾は、「我們研究古文字、既應注意每一字本身的形・音・義三方面的相互關係、又應注意每一个字和同時代其它字的横的關係、以及它們在不同時代的發生・發展和變化的縱的關係」（我々が古文字を研究するにあたっては、各文字の形・音・義三方面の相互の関係だけでなく、また各文字と同時代のその他の文字との横の関係、及びそれらの異なった時代における発生・発展・変化といった縦の関係にも注意しなければならない）と言い[13]、「留在至今的某些古文字的音與義或一時不可確知、然其字形則為確切不移的客觀存在。因而字形是我們實事求是地進行研究的唯一基礎」（現在まで残された古文字の字音と字義はすぐにはわからないが、字形は確実に移ろうことのない客観的な存在である。だから字形が、我々が実証的に研究を行う唯一の基礎なのである）と言う[14]。

順番が前後するが、まず未知の古文字は字音と字義がわからないが、字形は確かに目の前に残されている。だから字形が研究の出発点となるということが確認される。そしてそのうえで、文字の横の関係、すなわち殷代なら殷代、戦国時代なら戦国時代といった同時代の他の文字の字形上のつながりと、縦の関係、すなわち殷代甲骨文→西周金文→戦国文字→小篆といった字形の時代的な変化を明らかにし、いかなる文字なのかを確定していくということである。

そうした中国文字学の「以形為主」の基本方針の見本として、白川静が取り組んだのと同じ「蔑曆」に関する研究、ここでは陳剣の論考「簡談対金文“蔑懋”問題的一些新認識」を取り上げてみたい[15]。

陳剣はまず「蔑曆」の「曆（曆）」字について、金文に見える殷代や西周早期といった古い時期の字形では、「秝」の部分はその実「林」の形となっており、かつ二つの「木」の間に「丄」の形があることに注目する（図１③の黒丸で囲んだ字形を参照）。そして

①金文の「懋」字　　②『越公其事』の「歴」字

図２

金文の「懋」の字形と比較のうえ、「丄」は「牡」字の従う所であり、「矛」とも通用することから、これまで「暦」とされてきた文字は「楙」の異体を声符とし、「懋」と読むべきであるとする（金文の「懋」字は図２①を参照）。「蔑暦」と釈されてきた語は、実は「蔑懋」であったというわけである。「懋」とは「勉励」、すなわち「はげます」「つとめる」の意である。これに新出の戦国竹簡の事例を補証として加える。たとえば清華簡（清華大学蔵戦国竹簡）『越公其事』第三二簡に「亓（其）見蓐（農）夫老弱堇（勤）歴者、王必酓（飲）飤（食）之」とあるが[16]、陳剣はこのうちの「歴」字に着目し（図２②）、これは「懋」と読むべき字であり、西周金文以来の古い字形を残すと評価する。陳剣説に沿ってこの文を読み下すと、「其の農夫の老弱にして勤懋（つとむ）る者を見れば、王、必ず之に飲食せしむ」となる。それでは「蔑」字はどう解釈するのかというと、こちらは「幎」に通じ、「覆被」（こうむる）の意であるとする。「蔑懋」で「勉励を被る」、すなわち口頭で励ましを受けるの意であると結論づけている。

ここでは従来「暦」とされてきた金文の字形について、早い時期の字形に注目したり、戦国文字と比較したりと、主に文字の縦の関係に注意して議論を進めている。この陳剣の研究に示されるように、中国文字学の特徴は、字形の縦の関係や横の関係といったつながりを追求する、古文字の字形が果たして何を象ったものかという字源の探求には必ずしも拘泥しない、そして清華簡のような新しい材料を資料として積極的に採り入れるといった点に求められる。

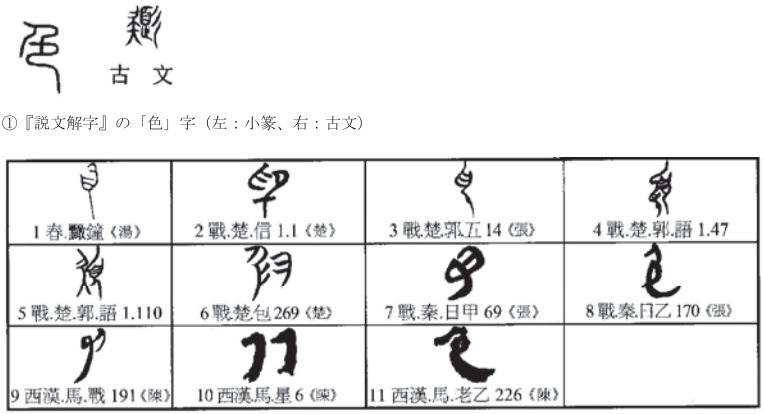
同じ「蔑暦」の語に関する研究を比較対象とすることで、古文字の字形の関係やつながりを整合的に説明しようとする中国文字学に対し、古文字の字形の向こうに古代の文化や社会のあり方を見出そうとする白川文字学の目的が明確になったはずである。

３　新しい材料への対応

前章で紹介した陳剣の論考だけでなく、中国では「蔑暦」に関する研究が継続して発

表され続けている[17]。それは、新出の金文や戦国竹簡で関連する字句が時折出現し、その都度「蔑暦」に対する関心が高まり、従来の議論に対して再検討が行われるからである。

たとえば西周金文では、「蔑暦」に類似する用法となる「叔朕父加曶暦」の句を有する曶簋が公表された際に、句中の「加」字は「嘉」と通用し、この句は「叔朕父（人名）、曶（人名）の暦を嘉す」と読み、「蔑暦」の「蔑」は「伐」字と通用し、「美」すなわち「称美」の意であるとする唐蘭の説[18]は妥当であるとするような議論がなされた[19]。戦国竹簡では前述の清華簡『越公其事』の「歴」字のほか、上博簡（上海博物館蔵戦国楚竹書）『曹沫之陣』で「曹沫」の「沫」に相当する文字が「蔑」あるいは「穢」と表記されていることや[20]、清華簡『繫年』第３章で「飛廉」の「廉」に相当する文字が「暦」と表記されていること[21]が「蔑暦」の研究において注目されてきた。このように文字学は新しい材料の出現によって従来の説が再検討され、書き換えられるものなのである。字形の縦の関係と横の関係を強く意識する中国文字学の「以形為主」は、用例が増えれば増えるほど議論に説得力が増すので、新しい材料に常に注目している。



①『説文解字』の「色」字（左：小篆、右：古文）

②古文字の「色」字

図３

白川文字学も戦国文字など新しい材料によってアップデートする必要がある。特に問題となるのは、従来『説文解字』所収の小篆や古文などにしか古文字の字形が見えなかったが、その後東周期以前の字形が発見されたものである。一例として「色」字を取り上げる。白川静『字統』では、「色」字について『説文解字』に見える篆文（小篆）

と古文の字形（図３①）のみを挙げて会意の字とし、特に小篆の字形について「人と卩とに従う。卩は跪く人の形。人の後ろにまた人がおり、抱く形で相交わることを示す」とし、また『説文解字』巻９上の「顔气也。从人、从卩」（顔气なり。人に从い、卩に从う）に対して「顔色などをいう字ではなく、男女のことをいう字」とする[22]。白川静『説文新義』によると、これは清末の孔広居『説文疑疑』の「色、女色也」（色は、女色なり）、民国期の林義光『文源』の「按人・卩非義、卩亦人字、象二人、與比字・尼字同意、美食所比所尼之物」（按ずるに人・卩は義に非ず、卩もまた人字、二人を象り、比字・尼字と同意、美色の比する所尼する所の物なり）、馬叙倫『説文解字六書疏証』の「色當爲男女交冓之義、從人在人上」（色は當に男女交冓の義と爲すべし、人の人の上に在るに従う）など、複数の解釈を参照したものである[23]。

なお、「色」字の字源や語源については、加藤常賢と藤堂明保も男女の交わりの方向で解釈している。加藤常賢はやはり孔広居『説文疑疑』などを参照しつつ「人に従い卩の声の形声字」とし、声符の「卩」は交合の意を表す「属」に変化し、意符の「人」と合わせて「二人が取っ組んで連続して一つになる意である。性交の状態そのものである」とする[24]。藤堂明保は加藤説を承けて「性交そのものを表している」とし、「人＋人の会意文字で、男女の交合するさまを示す」とし、語源としては「思」「司」「息」「塞」字などとともに「狭い穴」「狭い間隙をこする」という意味を共有すると見ている[25]。また藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典』では、男女が体をすり寄せて性交するさまを描いた象形字とし、「すり寄せる」「くっつく」といった意味を共有する「即」「則」「塞」字などと同系とする[26]。

しかし新出の東周金文や戦国竹簡で「色」字が出現したことにより（図３②）、近年では「色」字の字源について男女の交わりと結びつけるものとはまったく異なる方向の説が提唱され、受け入れられている。近年発見の資料や新しい研究を取り込んだ字源辞典としては、李学勤主編『字源』や季旭昇『説文新証』がある。

『字源』はまず何琳儀『戦国古文字典』の説明を引き、「色」字の左は「爪」に従い、右は「卩」に従い、「面部顔色の意に会する」会意の字とする[27]。そして戦国竹簡の「色」字の字形（図３②の２～５）[28]については、「卩」の形が省略・変形されることが多く、あるいは「頁」を加えて顔面の意を顕示し（図３②の４・５）、『説文解字』の古文の字形（図３①の右側）はこの一形体から訛変したものである。時代が進むにつれ「爪」が上部に来て「刀」形に変化し（図３②の７～９・11）、会意の意味が失われたとする[29]。「面部顔色の意に会する」の意味が取りにくいが、「爪」すなわち手でもって顔面を指し示したり容貌を整えるさまを象っているという理解であろうか。いずれにせよ、「色」

の字形は「男女の色」ではなく「顔色」に関係するものであったという主張になる。

『説文新証』では、現在の研究者が多く古文字において「印」字とそれを反転させた形である「𠬝（抑）」字とが一字であると見なしていることを確認したうえで、「色」字は「𠬝（抑）」字の仮借分化字であるとし、更に「卩」の下部に横画や圏点を加えて「𠬝（抑）」と区別しているということで（図３②の２・３）、仮借分化指事字としている。「色」は疏紐職部、「𠬝（抑）」は影紐職部と同韻であり、音通し得る。『説文解字』の古文及び戦国竹簡の字形については、人の顔気を強調する「頁」を意符とし、「色」あるいはそれと韻が近い疑紐之部の「矣」を声符とする形声字とする（図３②の４・５）[30]。

『字源』と『説文新証』、いずれも東周金文や戦国竹簡といった新出資料の字形に基づいて解説し、清末の孔広居以来の男女の色と関係づける方向をまったく顧みていない。この「色」字の字源解釈の変化は、新出資料によってアップデートされていない白川文字学、ひいては日本の文字学の限界を示している[31]。単語家族論による語源解釈を追求する藤堂明保にしても、「色」字の場合のように多くが字源解釈に基づいて立論しており、その基づくところの字源解釈が妥当でない以上、新出資料によるアップデートが求められるのは白川文字学と変わらない。たとえ語源の追求を重視したとしても、于省吾の言うように古文字の研究の出発点となるのは字形なのである。

４　民俗学・文化人類学の応用

第一章で取り上げた白川文字学の四つの特徴のうち、②「民俗学・文化人類学などを応用すること」について再び考えてみたい。なぜ白川静は古文字の字形から古代の文化を見出そうとしたのであろうか。実のところそれは白川静個人の研究課題というより、白川静の生きた当時の世界の中国学全体の課題と関係するものであった。

たとえば『詩経』研究においては、フランス人中国学者グラネーの『中国古代の祭礼と歌謡』によって、詩を民謡・恋愛歌などといった古代歌謡と位置づけ、詩の原初的な意味を探るという研究の方向が示された[32]。白川静の『詩経』研究もグラネーの研究に触発され、かつ批判的に継承したものである[33]。

フレイザーの『金枝篇』は、祭司である王がその呪術力を失った時に殺される「王殺し」など、世界各地の呪術や信仰などに関する事例をまとめたものであり、「未開社会」あるいは古代社会の王権や宗教・神話を研究するうえでしばしば参照されてきた[34]。この『金枝篇』は民国期の中国古代史学にも影響を与えている。たとえば鄭振鐸『湯禱篇』は、書題からも看取されるように『金枝篇』の中国版と言うべき連作の論文集で、古代

中国の王権・呪術・神話などについて論じている[35]。表題作の「湯禱篇」では、『呂氏春秋』季秋紀・順民などに見える、殷の初代湯王が桑林で自らの髪や爪を切り、自分の身を犠牲にして天に祈り、旱魃を収めたという説話[36]より、古代中国にも「王殺し」の伝統があり、王には祭司の役割もあったことを論じる。白川静も『中国の神話』では『湯禱篇』を参考文献に挙げ、参照している[37]。また『金枝篇』そのものについても、『中国古代の文化』において「殺される王」について論じる際に、『呂氏春秋』順民などの記述とともに引用している[38]。

民俗学・文化人類学の応用は、ここで取り上げた鄭振鐸のように、中国学においては古代史や神話研究の分野で試みられてきた。近現代中国でその種の研究に取り組んできた著名な学者としては、ほかに顧頡剛や聞一多、楊寛らが挙げられる。日本の学者では白川静のほか、貝塚茂樹らが取り組んできた。たとえば中国神話について論じた貝塚茂樹の『神々の誕生』は、「序」に「内藤湖南先生の中国古代伝説研究法と、柳田・折口両先生の民俗学的古代研究法との習合によって、本書は成り立っている」と自ら述べているように[39]、柳田国男・折口信夫の民俗学の影響を強く受けたものである。白川静が折口信夫の研究に傾倒していたことは周知の通りである。

中国古代研究において「民俗学・文化人類学などを応用すること」は同時代の日本も含めた世界の中国学者の課題であり、白川静の研究もその歩みの中に位置づけられる。白川静の特異な点は、その民俗学・文化人類学の応用を古代史や神話研究だけではなく、文字学にも持ち込んだ点である。

文化人類学の応用については、フィールドワーク等によって得られた「未開社会」の文化・習俗や社会制度に関する調査報告を比較対照の材料としたり、文化人類学的な研究の視点を採り入れて文献を読み直すことにより、中国古代の文化や社会のあり方を考証するといったものであった。しかし現在は当の文化人類学の分野自体が、フィールドワークとは、植民地の宗主国など強い立場の豊かな者が、弱く貧しい者たちを一方的に調査・記録し、かつ多くの場合その妥当性が検証されることのない行為ではないかという批判にさらされるようになっている。文化人類学の側もそうした批判を受け入れ、従来調査される側だった国の研究者が、調査する側だった欧米諸国を調査対象とすることが増えたり、あるいは「先進国」の都市部の社会問題なども積極的に対象とするようになり、社会学に近いような形に変化をしている[40]。中国古代研究において民俗学・文化人類学の応用は、問題意識のあり方として既に古びたものとなってしまっている。

おわりに

本稿では、まず白川文字学の最大の特徴は「民俗学・文化人類学などを応用すること」であり、その研究の目的は古文字の字形から古代の文化や社会をさぐることにあったことを確認した。一方で中国文字学は、字形・字音・字義のうち字形の分析を最も重視するという点は白川文字学と共通しているが、同時代の文字の字形上のつながりや、字形の時代的な変化に注目し、その古文字がいかなる文字なのかを確定していくといった具合に研究の目的が異なっていた。そして中国文字学の場合は、古文字の字形の関係や変化を整合的に説明するために常に新しい材料を必要とするが、それとは対照的に、白川文字学は戦国文字など新しい材料によるアップデートがなされてこなかった点に限界があることを論じた。また白川文字学の「民俗学・文化人類学などを応用すること」について、そうした手法は同時代の中国古代研究の問題意識を文字学に採り入れたものであるが、それも既に古い問題意識となっていることを論じた。

本稿の表題に立ち戻り、白川文字学の今後の展望として、戦国文字など新しい材料を積極的に利用して字源説のアップデートを図ること、そして「民俗学・文化人類学などを応用すること」以外の新しい問題意識を提示することの二点を挙げることとしたい。

その新しい問題意識のひとつとして、考古学的知見との連携の強化を挙げておきたい。たとえば許進雄『中国古代社会』は、古文字の字形から中国古代の社会や生活文化を見出そうとしている点は白川文字学と共通しているが、こちらは字形と出土文物の形状など考古学的知見の参照が白川文字学と比べてより積極的に行われている[41]。講演終了後の受講者からの質疑応答で、白川静の「𠙵」字説は証明が可能なのかという質問があったが、これも考古学的知見との連携の強化によって証明とまではいかなくても、説得力を増すことはできるかもしれない。

図版出典

図１　①高明・涂白奎『古文字類編（増訂本）』（上海古籍出版社、2008年）、741頁。
　　②高明・涂白奎『古文字類編（増訂本）』、798頁。
　　③高明・涂白奎『古文字類編（増訂本）』、793頁。

図２　①高明・涂白奎『古文字類編（増訂本）』、478頁。
　　②陳剣「簡談対金文〝蔑懋〟問題的一些新認識」（『出土文献与古文字研究』第７輯、上海古籍出版社、2018年）、98頁。

図３　①高明・涂白奎『古文字類編（増訂本）』、59頁。

②季旭昇『説文新証』（芸文印書館、2014年）、711頁。

注

1　大形先生の担当部分も含めた講演の概要については、『まなナビ』「新発見で覆る定説。古代文字の世界はおもしろい」（https://kaigo.news-postseven.com/59893）を参照（2019年８月18日閲覧確認）。

2　たとえば落合淳思『漢字の成り立ち――『説文解字』から最先端の研究まで』（筑摩選書、2014年）。

3　嘉瀬達男「白川文字学の意義」（『入門講座　白川静の世界Ⅰ　文字』第２部第１章、平凡社、2010年）。

4　于省吾『甲骨文字釈林』序（于省吾著作集、中華書局、2009年。初版1979年）、３～４頁。

5　林澐『古文字学簡論』（中華書局、2012年。初版1986年）、47～48頁。

6　嘉瀬達男「白川文字学の意義」、67頁。また白川静『詩経』『万葉集』研究を志したことに対する白川静本人の弁は、「私の履歴書」（『回思九十年』、平凡社ライブラリー、2011年、初版2000年）に見える。

7　白川静『漢字百話』「あとがき」（『白川静著作集』第１巻、平凡社、1999年。初版1978年）、346頁。

8　この語は研究者ごとの字釈の相違によって「蔑歴」など種々の表記が存在するが、本稿では便宜的に白川静の字釈に沿って「蔑暦」の表記を採る。

9　「蔑暦」の研究史については、佐藤信弥「蔑歴の時代」（『西周期における祭祀儀礼の研究』、朋友書店、2014年。初出2005年）などを参照。

10　白川静「蔑暦解」（『甲骨金文学論叢』［下］２、『白川著作集別巻』、平凡社、2012年。初出1956年）。

11　白川静「再論蔑暦」（『白川静著作集』第12巻、平凡社、2000年及び『甲骨金文学論叢』［下］２、『白川著作集別巻』、平凡社、2012年。初出1980年）。

12　白川静『漢字――生い立ちとその背景――』（『白川静著作集』第１巻、平凡社、1999年。初版1970年）。同書において「蔑暦」に関しては37・114頁に言及がある。

13　于省吾前掲『甲骨文字釈林』序、３頁。

14　于省吾前掲『甲骨文字釈林』序、３～４頁。

15　陳剣「簡談対金文“蔑懋”問題的一些新認識」（『出土文献与古文字研究』第７輯、上海古籍出版社、2018年）。

16　清華大学出土文献研究与保護中心編、李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡（柒）』（中西書局、2017年）。

17　たとえば范常喜「金文“蔑曆”補釈」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、2011年１月９日、http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/1369）、季旭昇「従〈清華貳・繫年〉談金文的“蔑曆（廉）”」（李守奎主編『清華簡《繫年》与古史新探』、中西書局、2016年）、李零「西周金文中的“蔑曆”即古書中的“伐矜”」（『出土文献』第８輯、中西書局、2016年）など。

18　唐蘭「「蔑曆」新詁」（『唐蘭先生金文論集』、紫禁城出版社、1995年。初出1979年）。

19　張光裕「新見曶簋銘文対金文研究的意義」（『雪斎学術論文二集』、芸文印書館、2004年。初出2000年）。

20　馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（四）』（上海古籍出版社、2004年）。

21　清華大学出土文献研究与保護中心編、李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡（貳）』（中西書局、2011年）。

22　白川静『新訂字統［普及版］』（平凡社、2007年。初版1984年）、479頁。

23　白川静『説文新義』五（『白川静著作集別巻』、平凡社、2002年。初版1971年）、巻９上、69頁。

24　加藤常賢『漢字の起原』（角川書店、1970年、初版1949～1968年）、556～557頁、第1434項。

25　藤堂明保『漢字語源辞典』（學燈社、1965年）、117・118・120頁。

26　藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典（普及版）』（学研プラス、2005年。初版1978年）、1458頁。

27　何琳儀『戦国古文字典』（中華書局、1998年）、115頁。

28　図３②の６の字形（包山簡第269簡の字形）については、「色」字ではなく「翛（條）」字と見られる。陳偉等『楚地出土戦国簡冊［十四種］』（武漢大学出版社、2016年）、154・168頁注［187］を参照。

29　李学勤主編『字源』（天津古籍出版社、2012年）、799頁（周宝宏執筆）。

30　季旭昇『説文新証』（芸文印書館、2014年。初版2002・2004年）、711～712頁。

31　ただし白川静は殷金文・西周金文に関しては、最晩年まで新出資料の収集を行っていた。『金文通釈』通論篇第八章「西周期の断代編年一」及び第九章「西周期の断代編年二」は、『白川静著作集別巻』本の『金文通釈』５（平凡社、2005年。初出1975年）では、新出金文によって全面改稿されている。また『殷文札記　金文通釈続編』（『白川静著作集別巻』、平凡社、2006年）は、新出の殷金文も資料として取

り込んでいる。

32 M.グラネ著、内田智雄訳『中国古代の祭礼と歌謡』（平凡社東洋文庫、1989年。原書初版1919年）。

33 グラネーの『詩経』研究に対する白川静の評価は、『詩経研究通論篇』（『白川静著作集』第10巻、平凡社、2000年。初出1960年）、51～56頁を参照。

34 フレイザー著、永橋卓介訳『金枝篇』（岩波文庫、1966～1967年改版。原書簡約本1922年）。

35 鄭振鐸著、高木智見訳『伝統中国の歴史人類学――王権・民衆・心性』（知泉書館、2005年。原書初版1957年）。

36 『呂氏春秋』季秋紀・順民には、「昔者湯克夏而正天下、天大旱、五年不收、湯乃以身禱於桑林、曰、『余一人有罪、無及萬夫。萬夫有罪、在余一人。無以一人之不敏、使上帝鬼神傷民之命。』於是翦其髮、鄻其手、以身爲犧牲、用祈福於上帝、民乃甚説、雨乃大至」（昔者（むかし）湯、夏に克ちて天下を正すに、天、大いにし、五年收まらず、湯乃ち身を以て桑林に禱（いの）りて、曰く、「余一人に罪有るも、萬夫に及ぼすこと無かれ。萬夫に罪有るも、余一人に在り。一人の不敏を以て、上帝鬼神をして民の命を傷（そこな）うこと無かれ」と。是に於いて其の髮を翦（き）り、其の手を鄻（みが）き、身を以て犧牲と爲し、用て福を上帝に祈る、民乃ち甚だ説（よろこ）ぶ、雨乃ち大いに至る）とある。

37 白川静『中国の神話』（『白川静著作集』第６巻、平凡社、1999年。初版1975年）、214頁。

38 白川静『中国古代の文化』（『白川静著作集』第７巻、平凡社、2000年。初版1979年）、116～118頁。

39 貝塚茂樹『神々の誕生』（『貝塚茂樹著作集』第五巻、中央公論社、1976年。初版1963年）、８頁。

40 川口幸大『ようこそ文化人類学へ――異文化をフィールドワークする君たちに』（昭和堂、2017年）、161～163・172～173頁。

41 許進雄『中国古代社会――文字与人類学的透視』（中国人民大学出版社、2008年。初版1984年）。